

犯罪報道の共起ネットワーク分析 (2)¹

Co-occurrence Network analysis of criminal reports(2)

四方 由美・大谷 奈緒子*・北出真紀恵**・
小川 祐喜子***・福田 朋実****

本稿は、宮崎公立大学人文学部紀要第 25 巻第 1 号に掲載の「犯罪報道の共起ネットワーク分析 (1)」(以下、前稿)に続き、犯罪報道分析を行い、その結果をジェンダーの視点から考察したものである。週刊誌報道を対象にKHコーダーを用いて頻出語句を抽出した上で、共起ネットワーク分析を行い、事件報道において何がどのように関連付けて伝えられているのか、数量的かつ体系的にとらえることを試みた。犯罪事件の報道において女性被害者、およびその関係者の伝えられ方について特徴を導出することができた。

キーワード：犯罪報道、ジェンダーパースペクティブ、共起ネットワーク分析

目次

- I 問題の所在
 - 1 研究に至る経緯
 - 2 研究の視座と含意
- II 分析の概要
 - 1 分析の目的と方法
 - 2 分析の対象
 - 3 事件の概要
- III 犯罪報道の共起ネットワーク分析
 - 1 千葉大生集団強姦事件
 - 2 仏・留学生不明事件
 - 3 分析のまとめ
- IV 課題と展望

I 問題の所在

1 研究に至る経緯

これまで被疑者・被害者の名誉棄損、プライバシー侵害、被疑者を犯人視する報道などを中心に犯罪報道の在り方に関する議論が展開されてきた犯罪報道研究であるが、牧野智和（2012）が指摘するように、犯罪報道の実証研究および効果研究については客観的知見が十分といえるほど積み重ねられていない。加えて、個人情報保護法（2003年）をはじめとする報道・情報に関する法制度の強化²や、犯罪被害者等基本法（2005年）による被害者への配慮³、裁判員制度の導入（2009年）などの影響から変化がみられる（平川宗信 2010）とされる犯罪報道の現況についても、まだ検証が十分なされていない。こうした問題意識から、筆者らを含むメンバーで構成する「犯罪報道研究会」は、犯罪報道の実証研究に取り組んできた⁴。

他方、筆者は犯罪報道についてジェンダーの視点、性別による扱いの違い（ジェンダー・バイアス）や、それに起因する問題を指摘してきた（四方由美 2014）。しかしながら、この指摘は、内容分析の結果をもとに論理的に考察したものであり、より実証的な裏付けを必要とする。そこで、筆者ら「犯罪報道とジェンダー研究会」は、前稿（四方 2017）において、女性に関わる6つの事件⁵の新聞報道の共起ネットワーク分析を行い、報道内容の数量的・体系的把握を試みた。各事件の抽出語リストと共起ネットワークをもとに、事件報道の全体的傾向について検討したところ、死亡（殺害）事件の場合、抽出語として被害者名、被疑者名が多く出現し、特に被害者名が多い傾向にあるものの、個人のプライバシーや個人情報を想起する語や、煽情的な語が共起することはあまりないことが確認できた。女性に関わる事件の記事は、実名報道の有無は別として、客観的知見に基づく報道を行っている⁶と結論付けた⁶。この結果をより精緻化し、犯罪報道の検証をするために、本稿では週刊誌報道を対象に共起ネットワーク分析を行うに至った。

2 研究の視座と含意

「犯罪報道とジェンダー研究会」は、女性に関わる事件の報道を対象に分析を行ってきた。犯罪報道において、女性を取り上げられることは少なくない。むしろ、「犯罪と女性」の組み合わせは、センセーショナルリズムやスキャンダルリズムにさらされやすく、報道される個人のプライバシーへの配慮もないまま、繰り返し何度も報道されることがあった。とりわけ、女性被害者にその傾向は強かったといえる⁷。

また、女性被害者の報道においては、従来から議論されてきた人権やプライバシーといった諸問題に加えて、落ち度を責めたり、容姿について言及されるなどジェンダー（文化的性別）を背景とした特徴がみられる。報道上の表現において性規範（ジェンダー規範）に基づくラベリングがなされることは、報道が「ジェンダー」あるいは「女性」概念の産出に関与していると結論付けることができる（四方 2014）。

一方で、近年では異なる様相がみられる。従前と比べて被害者の個人のプライバシーや個人情報

は減少し、限定的になっている。このことは、前稿の新聞の共起ネットワーク分析においても確認している。このような変化は、新聞以外のメディアにおいてもみられるのだろうか。また、いかなる要因で変化したのだろうか。この変化は、犯罪報道の本来の目的とされる被害の回避(被害者予備軍へ警鐘)、犯罪の抑制(犯罪予備軍への警告)にどのような効果をもたらすだろうか。これらの点を研究の視座としたい。

II 分析の概要

1 分析の目的と方法

本稿の分析は、犯罪事件の報道において女性に関わる事件がどのような語・語句によって伝えられているのか、また、それらの語・語句同士がどのように関連付けられているのか明らかにすることを目的とする。

そこで、KHコーダーを用いた計量テキスト分析のなかでも、共起ネットワークを使った分析を行った⁸。共起ネットワーク分析では、記事中使用される語句が強い共起関係ほど太い線で表示され、また、語の出現数に応じてそれぞれの語(node)を表す円のサイズが変化し、出現数の多い語ほど大きい円が描かれる。さらに、語と語の共起ネットワークではそれぞれの語(node)がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているかが色で示される(樋口耕一 2014)。

なお、本稿では、事件当事者の個人情報に配慮して個人名を匿名に置き換えて記述している。分析は見出し、写真説明を含まない記事文を対象とし、基礎データを変換処理したうえで、KHコーダーによる作図を行った。

2 分析の対象

前稿では、2016年11月から2017年1月までの3か月間に起こった事件の報道のなかで、女性に関わる事件(女性が被疑者とされる事件、女性が被害者とされる事件)を抽出し、多く報道された事件から合わせて6件⁹(「大阪男児死体遺棄事件」「大阪乳児死亡事件」「千葉女兒殺人未遂事件」「千葉大生集団強姦事件」「仏・留学生不明事件」「大阪准看護師強殺事件」)を選定し、6事件の朝日新聞の記事を分析対象とした。

本稿では、これらの6事件のうち、週刊誌でも報じられた「千葉大生集団強姦事件」(『週刊文春』(2016年12月22日号)1件、『週刊新潮』(2016年12月8日号)1件、『週刊現代』(2016年12月24日号)1件)と「仏・留学生不明事件」(『週刊文春』(2017年1月19日号)1件、『週刊新潮』(2017年1月12日号、2017年1月19日号)2件)を分析対象とし、週刊誌は、週刊誌(一般)印刷公表部数上位3誌である『週刊文春』『週刊新潮』『週刊現代』を選定した(2017年1月現在)。

3 事件の概要

各事件の事件概要は、次のとおりである（2018年11月現在）。

(1) 千葉大生集団強姦事件

2016年11月12日に千葉県警は、酒に酔った女性に集団で性的暴行を加えたとして千葉大学医学部5年生のE(23)、F(23)、G(23)を集団強姦致傷容疑で逮捕した(学部氏名などは逮捕時には公表されず、12月5日に公表された)。12月5日には、学生らと一緒にいた医師のD(30)が千葉県警に準強制わいせつ容疑で逮捕され、2017年2月2日には、同じ女性への準強制わいせつ容疑で千葉市中央区の医師の男性(29)が書類送検された。千葉地検は、12月12日にEとFを集団強姦罪、Gを準強姦罪、12月22日にDを準強制わいせつ罪で千葉地裁に起訴した。準強制わいせつ罪容疑で追送検されていたE、F兩名については不起訴(起訴猶予)、千葉市中央区の医師の男性は2月21日に不起訴処分となった。

(2) 仏・留学生不明事件

フランス東部ブザンソンの大学に留学していた筑波大生Cさん(21)が、2016年12月23日から行方不明になっている事件である。元交際相手とされるチリ人の被疑者H(26)は、事件後チリに帰国したため、国際刑事警察機構(ICPO)を通じて国際手配された。仏検察は容疑者Hを殺人容疑で国際手配し、チリに身柄引き渡しなどを要請したが、チリの最高裁判所は2月、証拠不十分として身柄拘束を認めない判断を示していた。事件発生から1年が経過する前の2017年11月30日に行われた仏検察当局の記者会見では、被疑者の携帯電話の通信データを新たに入手したことや、データを基に新たな場所での捜索に着手することが明らかとなり、新たな捜索を行ったうえで、被疑者Hの身柄引き渡しをチリ当局に正式に要請する方針であるという(『読売新聞』、2017年12月1日、東京朝刊)。

III 犯罪報道の共起ネットワーク分析

1 千葉大生集団強姦事件

(1) 週刊文春

抽出語リストから、「恋愛」「工学」「女性」「被疑者G」「事件」「藤沢」の出現数が多いことがわかる。そのうち「恋愛」は11回で最も多く、「工学」と「女性」がともに7回抽出される(表1参照)。

また、出現回数は多くないものの、生々しい口語体の表現といえる語が多く抽出される。この生々しい表現は事件をあらわすものではなく、被疑者Gが好んで読んでいたメールマガジン「恋愛工学」が記事中に複数掲載されており、そのメールマガジンの記述を引用することによるものであるが、事件を想起させる情動的要素の強い記事とも解釈できる。

語と語句に関する共起ネットワークを検討したところ、主に、「恋愛」「被疑者G」がキーとな

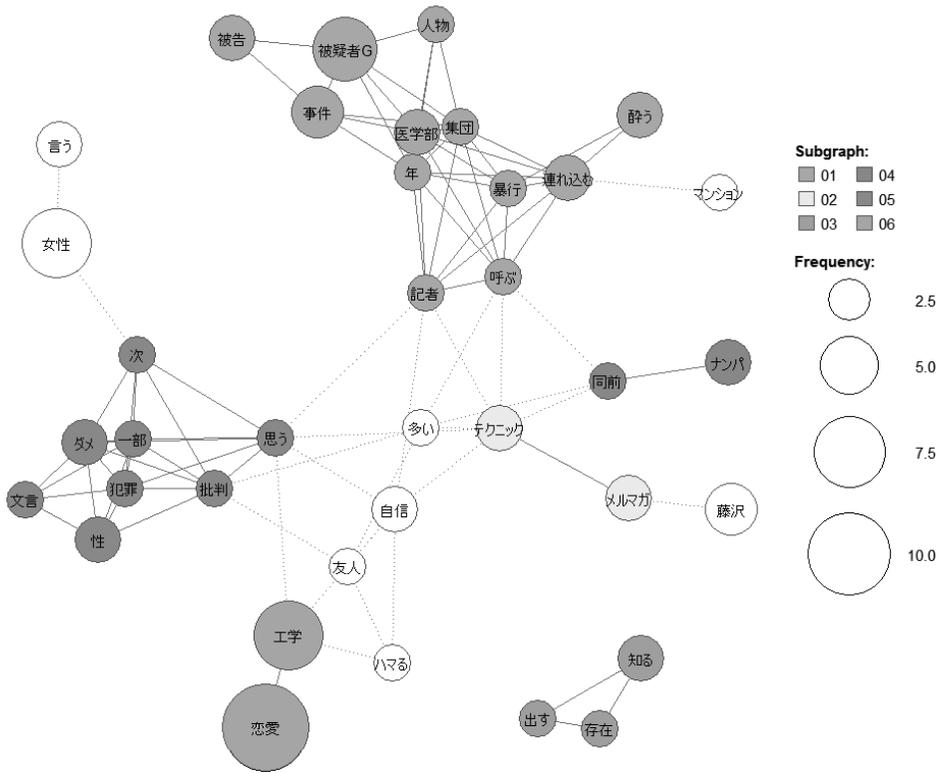
犯罪報道の共起ネットワーク分析 (2) (四方由美)

りグループが形成される。「恋愛」は「工学」と共起するが、これは前掲のメールマガジン「恋愛工学」を示す。「被疑者G」と共起関係にある語は多く、「事件」「被告」「医学部」「集団」「連れ込む」「暴行」「酔う」などが共起関係にある。「テクニック」と「メルマガ」は共起関係にあり、「藤沢」とも弱くつながるが、これは、藤沢氏が恋愛テクニックを指南するメールマガジンの運営者であるという文脈によるものである。そのほか、「性」「犯罪」「批判」「ダメ」「文言」などの語群で共起する、性犯罪を非難するグループが確認できる (図1 参照)。

表1 週刊文春 「千葉大生集団強姦事件」記事の抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
恋愛	11	存在	2	ハインサエティ	1	学生	1	語る	1
工学	7	多い	2	ハイレベル	1	学内	1	考え	1
女性	7	同前	2	バイブル	1	簡単	1	考え方	1
被疑者G	6	年	2	バンバン	1	関わる	1	行く	1
事件	4	犯罪	2	フラ	1	関係	1	行為	1
藤沢	4	批判	2	マガジン	1	関連	1	購読	1
ダメ	3	文言	2	メール	1	陥落	1	高い	1
テクニック	3	暴行	2	メディア	1	危険	1	高学歴	1
ナン	3	友人	2	レイプ	1	希	1	今回	1
バ	3	G	1	ワンルーム	1	記述	1	今年	1
メルマガ	3	SNS	1	愛	1	起きる	1	再度	1
医学部	3	その後	1	悪い	1	起訴	1	作家	1
言う	3	ほか	1	意識	1	逆	1	散見	1
自信	3	アービトラージ	1	意味	1	救急	1	仕立て	1
酔う	3	アタック	1	一室	1	居酒屋	1	刺激	1
性	3	イヤ	1	飲む	1	拒否	1	指	1
知る	3	イヤッ	1	運	1	強い	1	指す	1
被告	3	ウケる	1	運営	1	強姦	1	指南	1
連れ込む	3	ガンガン	1	円	1	恐れる	1	私淑	1
ストラテジー	2	クチュクチュ	1	演出	1	極めて	1	事実	1
ハマる	2	クラブ	1	下旬	1	金融	1	時折	1
マンション	2	クリ	1	下敷き	1	金曜日	1	自身	1
一部	2	スタティスティカル	1	加える	1	苦手	1	自宅	1
記者	2	スポット	1	夏	1	啓蒙	1	自慢	1
呼ぶ	2	セックス	1	快樂	1	繋がる	1	社会	1
思う	2	ダメ	1	海外	1	軽薄	1	主犯	1
次	2	デート	1	外資	1	欠如	1	手	1
集団	2	トイレ	1	確率	1	月	1	酒	1
出す	2	トリス	1	学外	1	見つかる	1	受ける	1
人物	2	ネット	1	学術	1	古今	1	収入	1

図1 週刊文春「千葉大生集団強姦事件」共起ネットワーク（語と語）



注) nodeは登場数2以上の単語、リンクはJaccard係数0.1以上の共起関係

(2) 週刊新潮

出現数が5回以上の語は、「事件」「学生」「発表」で、次いで多いのは、「関係」「記者」「強姦」「千葉」「千葉大」「逮捕」「男子」「被害」(すべて4回)であった。出現数が多い語から事件の概要が窺い知れる。その他、「両親」や「父親」の語が登場するのは、家族へのインタビュー記事を掲載していることによる(表2参照)。

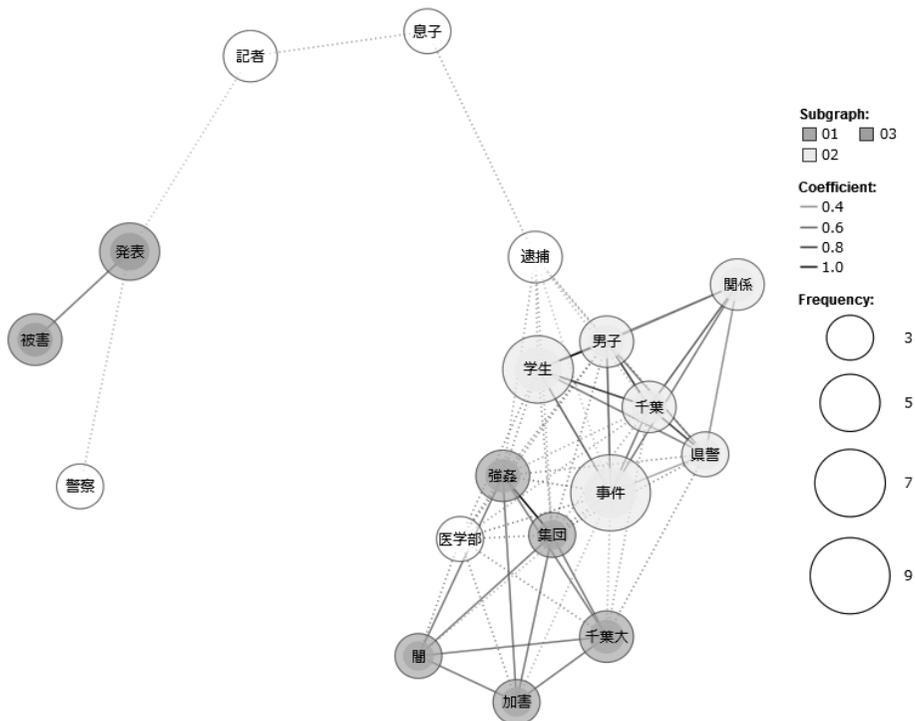
共起ネットワークでは、「事件」「強姦」「発表」をキーとするグループが確認できる。「発表」は「被害」と強い共起で結ばれ、「記者」「警察」ともつながる。「事件」のグループは、被疑者に関連するもので、「学生」「男子」「千葉」「県警」「関係」と強い共起関係にある。また、「強姦」を核とするグループは、「集団」と「強姦」が強い共起関係にあり、その他、「千葉大」「加害」「闇」がつながっている(図2参照)。このように共起ネットワークは被疑者に関する語群で構成され、被害者に関するものはみられない

犯罪報道の共起ネットワーク分析 (2) (四方由美)

表2 週刊新潮「千葉大生集団強姦事件」記事の抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
事件	9	大学	2	学府	1	子	1	早稲田大学	1
学生	7	知る	2	危険	1	市内	1	葬る	1
発表	5	致傷	2	喜劇	1	思い	1	体育	1
関係	4	懲役	2	幾度	1	支障	1	単独	1
記者	4	両親	2	期間	1	事実	1	誕生	1
強姦	4	110番	1	起きる	1	事情	1	仲間	1
千葉	4	お話	1	及ぶ	1	自宅	1	東大	1
千葉大	4	その後	1	居酒屋	1	手	1	当てる	1
逮捕	4	やり取り	1	共犯	1	手籠	1	当事者	1
男子	4	スーパー	1	強制	1	受ける	1	特定	1
被害	4	スポーツマンシップ	1	筋	1	重い	1	日本	1
間	3	タクシー	1	駆け込む	1	出る	1	年	1
医学部	3	テキーラ	1	慶応大	1	所業	1	納得	1
加害	3	トイレ	1	警視庁	1	所属	1	抜け出す	1
警察	3	フリー	1	劇	1	女性	1	悲劇	1
県警	3	ブラックボックス	1	隙	1	詳しい	1	病院	1
集団	3	レイプ	1	欠片	1	場	1	父親	1
息子	3	哀れ	1	光	1	触れる	1	伏せる	1
すすり泣き	2	暗がり	1	公表	1	信じる	1	聞こえる	1
飲む	2	移動	1	広告	1	寝る	1	包む	1
概要	2	一言	1	控える	1	新聞	1	報じる	1
月	2	一向に	1	絞る	1	申し訳	1	報道	1
研究	2	一切	1	行う	1	尋ねる	1	冒頭	1
言葉	2	下旬	1	今回	1	酔いつぶれる	1	類	1
作る	2	可能	1	今度	1	性	1	本当に	1
取材	2	会う	1	再度	1	生じる	1	無期	1
女子	2	改めて	1	最高	1	接触	1	無理矢理	1
捜査	2	開ける	1	罪	1	前日	1	名前	1
続く	2	蓋	1	惨劇	1	全国	1	明らか	1
対応	2	各紙	1	産婦人科	1	全然	1	明るみ	1

図2 週刊新潮 「千葉大生集団強姦事件」共起ネットワーク (語と語)



注) node は登場数 3 以上の単語、リンクは Jaccard 係数 0.1 以上の共起関係

(3) 週刊現代

分析対象3誌のなかで『週刊現代』は記事の分量が見開き2ページと多く、頻出語の出現回数は突出している。最も多いのは「医学部」の17回で、そのほか、10回以上出現したのは、「被疑者F」「学生」「大学」「弁護士」「逮捕」である。加えて、他誌では1回の出現語が多いが、ここでは、2回以上を数える語が多いことも特徴である。

その他抽出語には、「エリート」「名門」「トップクラス」「偏差」や「祖父」「父親」「お父さん」「お母さん」が含まれることから、属性や親族といった個人のプライバシーに関連する記事が掲載されているといえる(表3参照)。

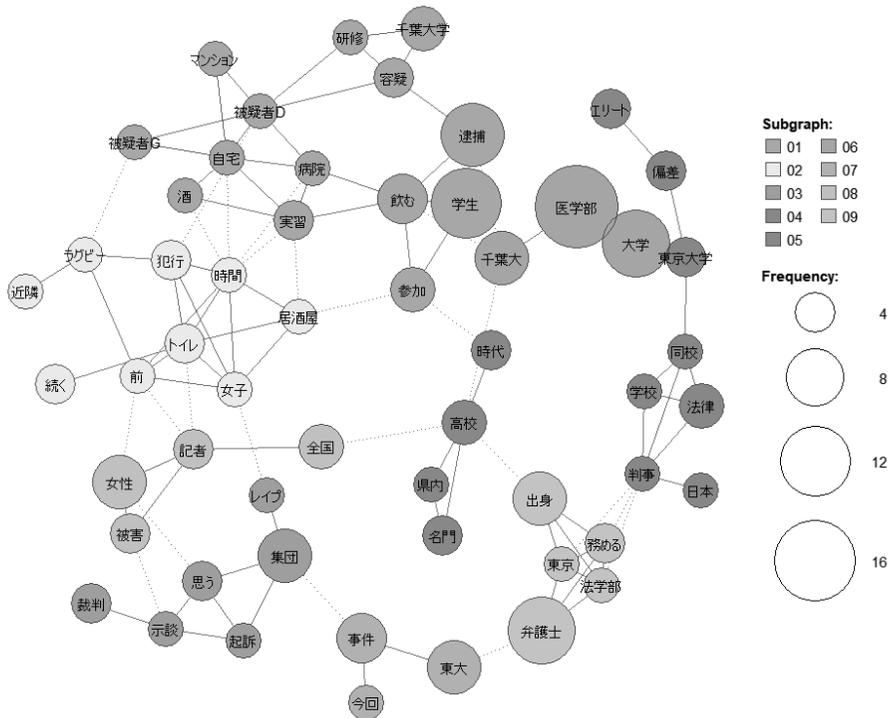
共起ネットワークで語と語の結びつきを確認したところ、『週刊文春』『週刊新潮』に比べて、グループが多いのが特徴である。キーとなる語は「医学部」「学生」「弁護士」「居酒屋」「女性」「集団」「高校」「東京大学」である。そのうち「医学部」は「大学」「千葉大」と、「高校」は「時代」「名門」「県内」と、「東京大学」は「偏差」「エリート」「法律」等と、「弁護士」は「法学部」「東京」等と共起する(図3参照)。これらの多くは、被疑者とその家族の職業や生い立ちに関するものである。

事件に関するグループは、それぞれ「学生」「居酒屋」「集団」を核とするもので、「女性」は全国紙記者の取材内容を表しているグループである。なお、『週刊現代』の記事の見出しは「千葉大医学部レイプ事件23歳犯人の華麗なる家柄」であり、事件報道というよりは、被疑者のプライバシーに関する内容で構成される。

表3 週刊現代「千葉大生集団強姦事件」記事の抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
医学部	17	被害	4	キャンパス	2	衆議院	2	入学	2
被疑者F	15	偏差	4	トップクラス	2	住民	2	発生	2
学生	12	務める	4	意識	2	出る	2	判断	2
大学	11	名門	4	医師	2	処分	2	犯罪	2
弁護士	11	容疑	4	引き起こす	2	所属	2	卑劣	2
逮捕	10	マンション	3	加える	2	神戸	2	被疑者E	2
集団	7	ラグビー	3	会長	2	人	2	被告	2
出身	7	レイプ	3	学部	2	酔う	2	父親	2
女性	7	一家	3	関係	2	性	2	法曹界	2
千葉大	7	学校	3	企業	2	生まれる	2	本誌	2
東大	7	起訴	3	期間	2	先生	2	遊ぶ	2
飲む	6	居酒屋	3	共犯	2	千葉	2	連れ込む	2
月	6	近隣	3	強姦	2	専門	2	應	2
事件	6	研修	3	屈指	2	祖父	2	TOP10	1
語る	5	県内	3	慶	2	卒業	2	5月	1
高校	5	今回	3	見る	2	他	2	あと	1
参加	5	時間	3	言う	2	多い	2	いま	1
千葉大学	5	示談	3	考える	2	待つ	2	お父さん	1
全国	5	自宅	3	考え方	2	退学	2	お母さん	1
法律	5	酒	3	行為	2	大隈	2	その後	1
エリート	4	女子	3	高い	2	大物	2	ほか	1
トイレ	4	前	3	高級	2	担当	2	アタマ	1
記者	4	東京	3	高橋	2	知人	2	イギリス	1
裁判	4	同校	3	今年	2	地元	2	インター	1
思う	4	日本	3	司法	2	致傷	2	オート	1
時代	4	判事	3	自主	2	中学	2	ガリ勉	1
実習	4	被疑者D	3	自分	2	長野	2	キャリア	1
続く	4	被疑者G	3	実名	2	同大	2	コメント	1
東京大学	4	病院	3	社会	2	特定	2	サークル	1
犯行	4	法学部	3	終わる	2	入る	2	スキー	1

図3 週刊現代「千葉大生集団強姦事件」共起ネットワーク(語と語)



注) node は登場数 3 以上の単語、リンクは Jaccard 係数 0.1 以上の共起関係

2 仏・留学生不明事件

(1) 週刊文春

抽出語リストのうち、出現回数が 3 回以上の語を抽出すると、「被害者 C」「フランス」「学生」「月」「現地」「容疑」となり、ここから事件の全体像を知ることは難しい(表 4 参照)。これは、前稿の新聞記事の分析傾向と類似している。

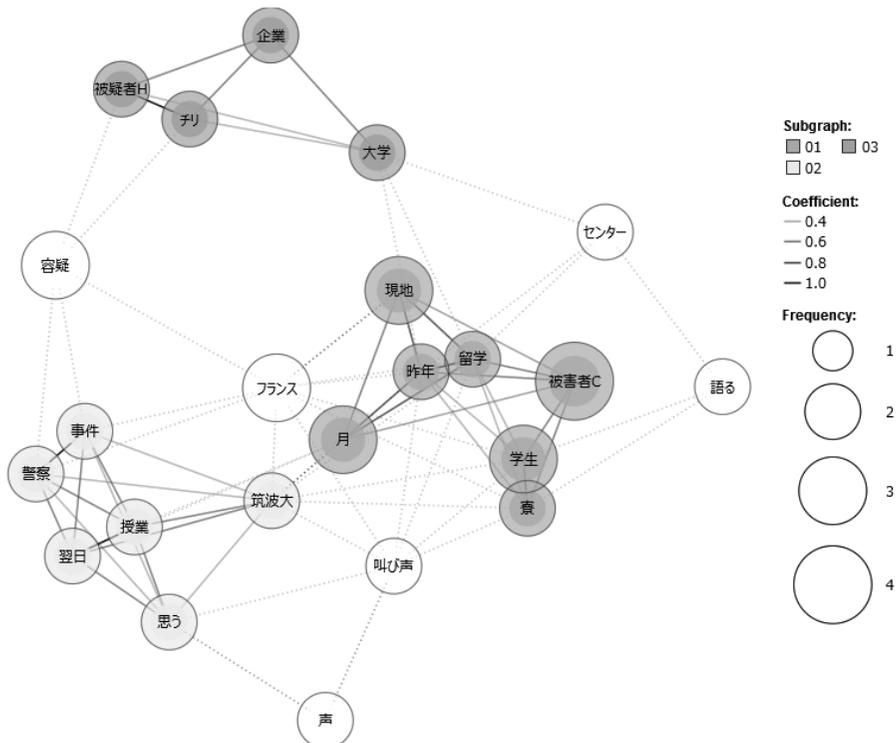
共起ネットワークで語と語の結びつきを検討したところ、「被害者 C」の円が大きく、「現地」「学生」「寮」「留学」「昨年」「月」が共起する。そのなかでも、「被害者 C」と「留学」「昨年」「月」「現地」が強い共起関係にある。そのほか、「被害者 H」と「チリ」、「翌日」と「授業」、「警察」と「事件」が強く共起する(図 4 参照)。

「被害者 H」-「チリ」の共起関係は、容疑者としてチリ人男性が浮上したことによるものであり、また、「翌日」-「授業」および「警察」と「事件」については、翌日の授業に来ない被害者 C を心配した友人の記事と、その後、1 週間経過しても連絡が取れないため、筑波大学へ連絡し、警察へ通報したことによるものである。

表4 週刊文春 「仏・留学生不明事件」記事の抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
被害者C	4	アーツ	1	開ける	1	受ける	1	迫る	1
フランス	3	アーツ	1	階	1	住む	1	表す	1
学生	3	コンテ	1	階下	1	出る	1	不明	1
月	3	サークル	1	覚ます	1	所長	1	浮上	1
現地	3	ショー	1	学ぶ	1	女性	1	父親	1
容疑	3	ジュネーブ	1	幹部	1	上達	1	部屋	1
センター	2	スイス	1	感じる	1	心配	1	仏語	1
テリ	2	ドア	1	記者	1	森	1	聞こえる	1
企業	2	パスポート	1	鬼気	1	深い	1	返信	1
叫び声	2	フランス	1	経つ	1	進める	1	法学部	1
警察	2	フランス語	1	計画	1	前	1	訪ねる	1
語る	2	フザンソン	1	見せる	1	捜査	1	未明	1
昨年	2	ホラー	1	言語	1	相手	1	眠り	1
思う	2	メッセージ	1	午前	1	送る	1	眠れる	1
事件	2	レンタカー	1	交際	1	行く	1	綿密	1
授業	2	愛	1	行方	1	断続	1	目	1
声	2	暗殺	1	在籍	1	男子	1	問題	1
大学	2	遺体	1	残る	1	男性	1	夜	1
筑波大	2	運河	1	姿	1	通報	1	友人	1
被疑者H	2	映画	1	時間	1	東部	1	予定	1
翌日	2	応用	1	耳	1	当局	1	連絡	1
留学	2	解決	1	主宰	1	同級生	1		
寮	2	海	1						

図4 週刊文春 「仏・留学生不明事件」共起ネットワーク（語と語）



注) nodeは登場数2以上の単語、リンクはJaccard係数0.1以上の共起関係

(2) 週刊新潮

『週刊新潮』は、『週刊文春』に比べて記事数が多いため、抽出語に加え、出現回数も多くなり、150語の抽出語の出現数はすべて2回以上となる。最も多い語は「被疑者H」の36回で、そのほか10回以上出現した語は、「チリ」「被害者C」「月」「フランス」「ブザンソン」「マンション」である。抽出語リストから、捜査状況に関する語が多く抽出されていることがわかる(表5参照)。

共起ネットワークをみると、多くのグループが形成される。「被疑者H」の円が最も大きく、「チリ」「サンティアゴ」と共起することから、記事の中で被疑者Hが多く取り上げられていることがわかる。次に、「被害者C」は「筑波大」「交際」「留学」とつながり、被害者Cの属性がわかる。そのほか、「マンション」は「ラ・セレナ」とつながるが、これは被疑者の両親や家族に関する記述で、記事では住所の記載はないものの、地域とマンションの部屋番号まで記載している。「フランス」は「昨年」「月」「国際」「手配」「帰国」と共起する。加えて、「事件」は「当局」「捜査」「潜伏」「殺人」「今」と共起することから、「フランス」のグループ、「事件」のグループとも、捜査当局に関する結びつきといえる。「ブザンソン」と「オルナン」はともに地名で、「ブザンソン」は「寮」「森」「寮」「カメラ」「防犯」と共起し、これは、森が広がるブザンソンに大学が位置すること、防犯カメラに映る被害者の姿についての記事による。「オルナン」は被疑者Hと被害者Cと一緒に食事をした場所である(図5参照)。

表5 週刊新潮「仏・留学生不明事件」記事の抽出語リスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
被疑者H	36	筑波大	5	レンタカー	3	ギョスタープ	2	間	2
チリ	18	日本	5	映る	3	クールベ	2	間違い	2
被害者C	18	部屋	5	会社	3	コンテ	2	含める	2
月	13	オルナン	4	記者	3	ショー	2	起こる	2
フランス	12	学校	4	午前	3	スル	2	距離	2
ブザンソン	12	帰国	4	後に	3	スイス	2	景勝	2
マンション	12	言う	4	広大	3	セーター	2	経る	2
サンティアゴ	9	今	4	最後	3	テレビ局	2	検察	2
年	9	時間	4	自宅	3	フランシュ	2	検事	2
寮	9	車	4	失踪	3	マドリード	2	見る	2
昨年	8	手配	4	取材	3	マプーチェ	2	玄関	2
出る	8	住む	4	住宅	3	レストラン	2	現在	2
事件	7	場所	4	女性	3	愛	2	現状	2
入る	7	森	4	情報	3	困む	2	言うまでもない	2
妹	7	人	4	成績	3	意思	2	午後	2
家族	6	潜伏	4	捜索	3	意味	2	語る	2
殺人	6	続ける	4	続く	3	一家	2	向かう	2
姿	6	大学	4	地元	3	一緒	2	広がる	2
知る	6	男	4	店	3	影	2	拘束	2
父親	6	当局	4	同校	3	円	2	高級	2
留学	6	聞く	4	日付	3	応じる	2	高校	2
カメラ	5	別	4	悲鳴	3	可能	2	今回	2
テムコ	5	報道陣	4	別れる	3	家	2	最高	2
ラ・セレナ	5	防犯	4	暮らす	3	画家	2	参考	2
関係	5	Fuck You	3	母国	3	会見	2	子	2
空港	5	Tシャツ	3	目撃	3	海	2	子供	2
交際	5	その後	3	優しい	3	外	2	持つ	2
国際	5	スペイン	3	容疑	3	街	2	耳	2
前	5	チリ	3	PTA	2	学年	2	重要	2
捜査	5	メディア	3	キイ	2	乾く	2	出国	2

IV 課題と展望

本稿で行った週刊誌の事件記事の共起ネットワーク分析からは、新聞とは異なる結果がみられた。女性が被害者の事件において、被害者の個人のプライバシーや個人情報を想起する語や、扇情的な語はあまりみられなかったものの、事件の詳細な記述や被疑者および被疑者の家族について個人情報やプライバシーにかかわる情報が多く報道される傾向にあった。また、その内容については読者の感情や欲望をあおるものもみられ、客観的知見に基づく報道が行われているといえない。この結果は、特定の事件の記事を対象とした分析のため一般化できないが、これが週刊誌における事件報道の特徴の一つであるならば、SNSによる二次利用状況も含めた影響を考察する必要がある。今後の課題としたい。

また、もう1つの研究の視座である、被害の回避や犯罪の抑制に寄与する報道として、性犯罪を批判する共起ネットワークが確認できた。犯罪報道の影響、およびその問題や在り方について論じるために、犯罪報道とジェンダー研究会では、報道内容の研究だけでなく報道内容を読者・視聴者がどのように受容しているか(受け手研究)、記者や制作者を取り巻く状況はどのようなものか(送り手研究)など、各方面からの総合的なアプローチを行うべく研究に着手している。これらについても順次公表し、犯罪報道研究を発展させていきたい。

引用・参考文献

- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子・川上孝之・松本憲始(2015)「時間・空間フレームにおける犯罪報道研究」『東洋大学社会学部紀要』第53-1号: pp.35-50
- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子(2016)「犯罪報道のフレーム分析」『東洋大学社会学部紀要』第53-2号: pp.33-46
- 大谷奈緒子・四方由美・川島安博・小川祐喜子(2017)「犯罪報道のフレーム分析(2)」『東洋大学社会学部紀要』第54-2号: pp.51-63
- 小玉美意子・中正樹・黄允一(1999)「雑誌における女性被害者報道の分析 事例研究:『東京電力女性社員殺人事件』を『学習院大男子学生殺人事件』と比較する」『ソシオロジスト』No.1:pp.1-38
- 四方由美(2014)『犯罪報道におけるジェンダー問題に関する研究 ジェンダーとメディアの視点から』学文社
- 四方由美・大谷奈緒子・北出真紀恵・小川祐喜子・福田朋実(2017)「犯罪報道の共起ネットワーク分析(1)」『宮崎公立大学人文学部紀要』第25巻第1号:pp.63-80
- 島崎哲彦・大谷奈緒子・小川祐喜子・伊達康博・柳瀬公・福田朋実・赤尾光史・四方由美・川上孝之(2012)「犯罪報道における被疑者および被害者の実名とプライバシーの取り扱い—明治期から現代までの変遷と問題点に関する実証的研究—」『東洋大学21世紀

ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報』第9号:pp.3-15

樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

平川宗信 (2010) 『報道被害とメディア改革 人権と報道の自由の視点から』解放出版社

牧野智和 (2012) 「犯罪報道研究の現状と課題」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』20号-1:pp.13-24

矢島正見 (1991) 「犯罪報道の社会的分析」『犯罪と非行』No.90:pp.38-55

¹ 本研究は、2016年～2019年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（研究代表者 四方由美）で実施した「犯罪報道におけるジェンダー問題に関する実証的研究」の研究成果の一部を発表するものである。本研究の構成員は、共著者の他に、国広陽子（武蔵大学）。

* 大谷奈緒子（東洋大学） ** 北出真紀恵（東海学園大学） ***小川祐喜子（東洋大学）
****福田朋実（宮崎公立大学）

² 個人情報保護法の近年の改正は2017年5月。ほぼすべての企業に個人情報保護法上の義務が課された。

³ 犯罪被害者等基本法（2005年）に基づいて閣議決定された犯罪被害者等基本計画は、警察発表で被害者を匿名にすることを盛り込んでいる。

⁴ 犯罪報道研究会の成果は、島崎哲彦ら（2012）、大谷奈緒子ら（2015、2016、2017）など。

⁵ 事件の選定については、本稿Ⅱの2を参照のこと。

⁶ ただし、分析対象とした事件は事件の性質が異なること、分析対象となる事件数や記事数などの要件から、近年の新聞の事件報道の傾向として一般化することはできない。

⁷ 矢島正見（1991）は、犯罪報道における被害者の分析を行い、女性被害者は男性被害者と比べ報道される率が高いと指摘する。小玉美意子ら（1999）は、東京電力女性社員殺人事件（1997年）と学習院大男子学生殺人事件（1997年）の週刊誌報道を比較分析し、女性が被害者の場合は、男性が被害者の場合と比べて、プライバシーの侵害が著しいとする。

⁸ 樋口耕一（2014）は、語と語が線で結ばれているので、多次元尺度構成法よりも、解釈しやすい場合があるとしている。

⁹ 朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の報道件数をカウント。